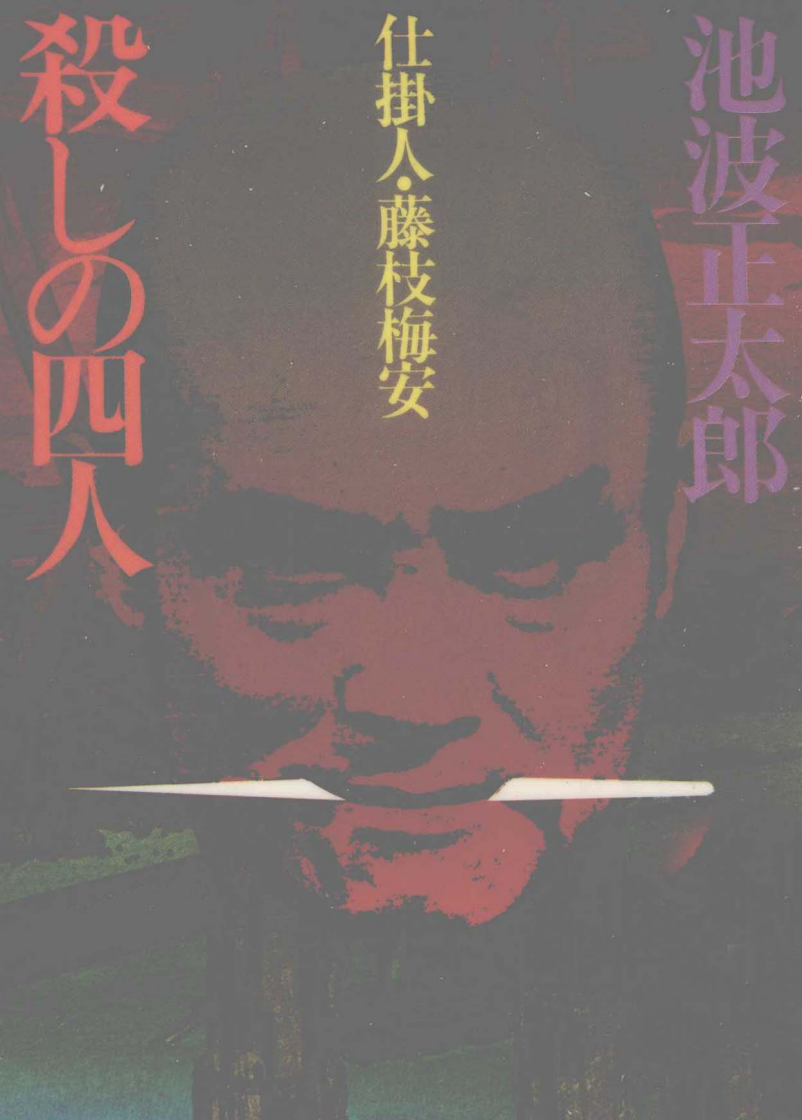


池波正太郎

仕掛人・藤枝梅安

殺しの四人



ころ 殺しの四人 仕掛人・藤枝梅安

いけなみしょう たろう
池波正太郎

© Shotaro Ikenami 1980

昭和55年3月15日第1刷発行

昭和62年9月3日第20刷発行

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan



講談社文庫

定価340円

デザイン——菊地信義

製版——株式会社東京印書館

印刷——凸版印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えます。(庫一)

ISBN4-06-131617-6 (0)

殺しの四人

目次

おんなごろし

殺しの四人

秋風二人旅

後は知らない

梅安晦日蕎麦

あとがき

解説

小林久三

二四三

一九 二五 九七 四七

殺しの四人

仕掛人・藤枝梅安

おんなごろし

一

そのとき、下駄屋の金蔵は、女房おだいがとめるのもきかずに、寢床の上で煙草を吸っていた。病みあがりの金蔵だが、いくらか元気になると、これまで絶ち切っていた大好物の煙草の味をおもい出してたまらなくなり、おだいが用たしに出かけた留守をねらい、ひよろひよると戸外へ出て、同じ品川台町の通りにある煙草屋で煙草を買い、おだいが隠しておいた煙管きせるを見つけ出し、（飛びつくように……）吸いはじめたのであった。

五つになるむすめを背負って帰って来た女房が、これを見て、びっくりし、

「お前、梅安先生ばいあんに、こんなところを見られたらどうするつもりだえ」

煙管を取りあげようとするのへ、

「うるせえ。ちつとばかりやったところで、どうこうなるわけのものでもねえや」

金蔵はおだいを突き飛ばし、たてつづけに煙草を吸った。

青ぐろく浮腫んだ顔や躰へにじむ汗が葉臭かった。

そこへ……。

裏口から、ふらりと鍼医者の藤枝梅安が入って来たのである。

二間きりの家の中へあがつて来た梅安は、いきなり、ものもいわずに金蔵のあたまをなぐりつけた。

「あっ……」

金蔵は、あたまを抱えてうずくまってしまう。

梅安が煙管を二つに折って、わがたもとへ入れ、煙草入れもふところへしまこんだ。六尺に近い大きな躰の藤枝梅安の、こうした動作は実にゆったりとしたものであつて、団栗のような小さい両眼は大きく張り出した額の下にくぼんでい、開いているのか閉じているのかさえもよくわからぬ。

坊主頭にしてはいるが、梅安は盲目ではない。近年は盲人たちももみ療治のほかに鍼をうって治療をするほどになつてゐるけれども、藤枝梅安について、このあたりの人びとは、

「なんでも、上方で、みっちり修行をすつたらしい」

「あの大きな躰で、あのふとい手指で、あんな細い鍼をよくあやつれるものだと思心するね」

「見たところは、妙にのろのろしていて、あぶなつかしいが……」

「それにしても、よく効くというじゃあねえか」

「そりやもう、できめんだよ。おれなざあ、三月も痛みがとまらなかつた腰の、ここんところを五日で癒してもらつた」

「へへえ、そんなものかね」

「そのかわり、気が向かねえと、いくらたのんでも来ちゃくれねえ。なにしろお前、治療のときも口ひとつきかねえ変人先生だ」

それほどに無口な梅安が、下駄屋の金蔵にめずらしくこういった。

「病いで死むし損むしなったのを忘れたのか。夜もねむらず、看病をしつづけた女房のころを忘れたのか。きさま、煙草なぞのんだら、三日であの世へ行くことになるのだぞ」

ゆっくりといいきかせているのだが、突つ伏ぶしている金蔵は、ふるえあがっていた。

治療をすまして藤枝梅安が帰って行ったあと、金蔵がおだいに、

「あの声をきいたか。凄しみえ声だった……」

「そうかねえ。なんだか、ぼそぼそといったようにだけど……」

「いいや凄え。おらあ、梅安先生に殺されるか、と、そうおもった……」

「なんだねえ、ばかな。私は、ありがたくきいていたよ。お前さんも、もういけませんよ、煙草なんぞやっては……」

「わかった。わ、わかつているともよ」

どうしたわけか金蔵は、ぐったりと床に横たわり、急に、おとなしくなつて女房のことを素直にきいている。

おだいは、先の梅安の言葉や声を、凄いとも恐ろしいとも感じてはいない。

いずれにせよ、亭主がおとなしく病後を養い、一日も早く店へ出て仕事をしてくれなくては困るのであった。

下駄屋金蔵の家は、品川台町の坂の途中にある。当時このあたりは、南から西へかけていちめんひろがる田畑と雑木林を見下す高台で、江戸の郊外といつてよく、大名・武家の下屋敷と寺と、丘と木立の中にはさまれた百姓小屋であつた。

品川台町の通りを南へ下つた左手に、「雉子の宮」の社がある。ものの本に、

「このあたりは北品川領、大崎という。慶長のころ、將軍家御放鷹のとき、この社へ雉子一羽飛び入りたり。そのとき神名を問わせられしに、このあたりの百姓たち、山神の祠なるよし申しあげければ、以後は雉子の宮と唱え申すべきむね、上意ありてより、かく号くるといふ」などと、しるしてある。

別当は宝塔寺といい、丘の上の社殿を仰ぐ鳥居の右手に、その本堂が在つた。

鍼医者・藤枝梅安の家は、この雉子の宮の鳥居前の小川をへだてた南側にある。わら屋根の、ちよつと風雅な構えの小さな家で、こんもりとした木立にかこまれていた。

外見は四十をこえて見える梅安だが、この寛政十一年で三十五歳になる。

梅安は助手も女中も置かぬ（ひとり暮らし）で、家の掃除や洗濯には、近所の百姓の老婆が通つて来てくれる。

梅安が家へもどると、見事に肥つた沙魚が十余尾、箆に入つて台所へ置かれてあつた。

こうしたことは、めずらしいことではない。

どちらかといえは懶惰で、無愛想きわまりなく、金品にも執着がない藤枝梅安のだが、鍼医としての腕は相当なものらしく、病氣全快をした人びとがこうしていろいろ届け物をして来る

のだ。

して見ると梅安は、どこか患者に好まれる性格をもっているのやも知れぬ。もっとも、梅安は初めに診察をして、自分の手に負えぬことがわかると、

「私ではだめだ。もっと、うまい医者に診ておもらい」
はつきりといい、さっさと帰ってしまふ。

そうしたときの梅安は、

「取りつく島もない……」

ほどに、すげないそうな。

台所の沙魚を見るや、梅安は、びちゃりと舌を鳴らした。食欲をそそられたらしい。

新年を迎えたばかりの、このごろの沙魚は真子・白子を腹中に抱いて脂がのりきっている。

梅安は、のろのろと鍋を強火にかけ、生醬油に少々酒を加え、これで沙魚をさっと煮つけて、
おいて、

「ふむ、ふむ……」

ひくひくと鼻をうごめかしながら、居間へはこび、冷酒を茶わんにくみ、炬燵へ入ってすぐさま食べはじめた。

朝から、どんよりと曇っていた空から白いものが落ちてきはじめた。まだ七ツ（午後四時）にならなかつたが、梅安は行灯にあかりを入れ、またしても箸を把って、残りの沙魚を平らげてしまった。頭も骨も残さぬ。

「ごめんなさいましよ。もし、梅安先生。おいでなさいますかえ？」

戸口で、しわがれた声がした。

梅安は、茶わんの酒をのみほしてから、

「親方ですね。ま、おあがんなさい」

炬燵こたつでぬくもったまま、こたえた。

三間の小さな家である。

訪問者がすぐに、梅安の居間へ入って来た。

梅安と同様、これでもつぷりと肥って、風体ふうていも上品な、どこぞの本店おとだなの主人あるじにも見えようという、いかにもおだやかな人相にんそうの老人なのである。

親方、と梅安がよんだ老人は、さし向いに炬燵へ入って来て、

「ふってきたねえ」

「この寒いのに、よく、ここまで……」

「なあに、駕籠かごを雉子の宮の近くの茶店へ待たしてありますよ」

「ところで、何か？」

「わしが、ここへ来るときの用事は、きまっていますよ、梅安さん」

「ふむ……」

「人ひとり、また殺ころっておもらい申したいのですね」

「ふむ……」

老人は、赤坂・田町の桐畑近くに密集する娼家の束ねたばをしている顔役で〔赤大黒の市兵衛あかだいこくいちべえ〕という。

江戸の暗黒街でも、

(それと知られた……)

経歴と勢力をもつ市兵衛であった。

市兵衛は、六十をこえているくせに、まだつるつるとあぶらの乗った手で、小判三十五両を包んだ袱紗ふくさを炬燵くわだの上へ置き、梅安の顔をのぞきこむようにした。

梅安は不精ぐしやうたらしく炬燵から手をぬき、袱紗の中身をあらためてから、わずかにうなずいて見せた。

「承知しておくんなさるかえ？」

「先ず、殺しの相手をうかがおう」

「女ですよ」

「ふうん……」

「薬研堀やげんぼりにある大きな料理屋で万七まんしちという……そこの女房のおみ、おみ、というのを殺してもらいたいのだがね」

梅安は黙って、あくまでも無表情に市兵衛をながめた。

「万七」の女房というなら、それは後妻のはずである。

なぜなら三年前に、藤枝梅安は、万七の女房・おしずを殺していたからだ。
もっとも、このことを赤大黒の市兵衛が知っているはずはない。

三年前のそのとき、万七の女房殺しを金五十両で梅安に依頼してきたのは、本所・両国一帯の盛り場を縄張りななばりにしている香具師やぐしの元締・羽沢はねざわの嘉兵衛かへいだったのである。